それでも時計は止まらない

2syoku

それでも時計は止まらない

『それでも時計は止まらない』　　作　二色

　――なぁ、俺達、付き合わないか？　それは、幼稚園から続いた孝則と由佳の「友人以上」の関係に終止符を打つ言葉だった。　泣きそうな笑顔で頷いた由佳を、孝則は優しく抱きしめた。

　彼女が好きだった。さらさらの長い黒髪が好きだった。大きな瞳が好きだった。柔らかい手が好きだった。すらっとした、少し高めの背が好きだった。そしてなにより、優しい笑顔が好きだった。　毎日が輝いていた。今まで惰性で過ごしていた日常の一日が、価値のあるものになった。二人で一緒にいる時は更にそれを実感できた。　春の花は今までより美しく思えた。夏の日差しは眩しさを増した。秋の木々の紅葉は彩が増えた。冬の雪は天使の羽根のように見えた。思春期真っ盛りの男女にしては健全なお付き合いだったが、それは今までの積み重ねの延長にある関係だったからかもしれない。　少し帰りが遅くなったある日。家まで送ると言った孝則と道の途中で別れ、由佳は自宅へ向かっていた。　振り返り、手を振りながら歩いていく由佳。小さくて狭い交差点に入る。　一瞬の出来事だった。　由佳の体が宙に舞い、遅れて、けたたましいクラクションと、大きな衝突音――由佳の命を断ち切ろうとする死神の鎌の音――が聴こえた。

　彼は一目散に走り出した。車のドライバーがなにやら携帯で電話をしているのが視界の端に見えたが、そんなものはどうでもよかった。　サイレンの音が聴こえる。警察か、救急か。もう、それもどうでもよかった。血に染まる彼の腕の中で、彼女は、ゆっくりと目を閉じた。とても、とても幸せそうに。　由佳が搬送され、ドライバーがパトカーに乗ってからも、彼は動けなかった。警察官が何事かを聞いてきたが、何を喋ったかも覚えていない。　翌朝、彼女が亡くなったと一本の電話が入り――彼の中の時計は、その瞬間、止まった。

　カーテンを締め切った真っ暗な部屋。部屋には電灯すらついていない。かろうじてベッドの上で寝ている人影が見える。時を止めた部屋に、エアコンの稼動音だけが響いている。　それ以外の音は全くしない。往来の車の音や散歩中の犬の鳴き声が微かに聴こえるくらいだ。その時、耳障りな振動音が部屋に響いた。　静寂を破ったのはマナーモードにしたままの携帯。ベッドの上の男子は携帯に手を伸ばす。どうせくだらないメールだろう、と思い件名を見た。刹那、彼の瞳が大きく開かれた。　――ありえない。　思わず携帯を握る手に力が入る、ゆっくりと暗証番号を入力して、メールを開く。本文を読むと彼はベッドから飛び起きて、部屋を出て階段を駆け下り、玄関で履き古したスニーカーをつっかけてそのまま走った。　初夏の日差しは鈍りきった体に突き刺さり、汗が滲んで、息が切れる。口からは荒い息を吐きだし、服はずっと着っぱなしの寝巻きのジャージで、おまけに髪は寝癖がついていた。しかも現在は平日の午後一時。普通の高校生なら授業中の時間だ。　だが、それでも彼の走るスピードは緩まない。ただ一目散に走った。焼けた硬いアスファルトを何度も踏みつけて、足が痛い。　どうにかして目的の場所である公園に着いたときには、呼吸が辛いのを通り越して、吐き気を覚えるほどだった。　公園には一人の女の子がいた。彼が通っている、正確には通っていたのと同じ高校の制服を着て、汗を流すこともなく、ただ佇んでいた。　彼女は彼を見つけると、微笑みながら囁いた。「ただいま、孝則」　孝則と呼ばれた少年は目を擦った。彼女が、今、目の前にいる。　そうか。あれは間違い

だったんだ。俺の思い込みだったんだ。もしくはいたずら電話かなにかで……そもそも、電話を取ったのは母さんだし……。とにかく。「……由佳、本当に由佳なんだな？」　孝則は由佳と呼んだ女の子に歩み寄っていく。彼女は微笑んだままそれを待っていた。たった数歩の距離は、孝則には永遠に感じられた。一歩、また一歩。　その短い永遠が終わりを告げたとき、由佳が孝則の手に自分のそれを重ねる。温かくて、柔らかい手だった。　孝則の目から大粒の涙が溢れた。後から後から溢れて、落ちた雫は暑い日差しで乾いた公園の砂に吸い込まれていく。止めることはできなかった。「よかった……本当によかった……」「……ほら、メソメソ泣かない！」　呟く彼の背中を複雑な笑顔で由佳は叩いた。乾いた音が公園に響く。「痛ッ！　何するんだよ！」　そう、こんなところも変わっていない。彼はどこか安心感を覚えていた。由佳はそんなことお構いなしに叩いた手を振っている。「うわ、背中汗臭い……ほら、シャワー浴びて、制服に着替えて、学校行くよ！　どうせあたしがいなかった間、家でウダウダしてたんでしょ！」　正解だった。彼は家どころか、自室からもロクに出なかったのだ。「はいはい。そうだよ。久しぶりに行っても勉強についてけるか分からないけど」　彼女はにっこりと微笑む。「孝則なら大丈夫だよ。むしろあたしが教えてもらわなくちゃいけないかもね」　由佳は孝則の手を掴んで歩き出した。彼の家の方角へ向かう。そして、それは由佳の家の方角でもある。「あたしが家族と話してる間、孝則は登校の準備。いい？」「分かったよ」　彼のショックは大きく、あの日から部屋に閉じこもり、家の外にはほとんど出なかった。それが二ヶ月も続いた。　今日がちょうどその二ヵ月目。ついさっき、メールが彼の携帯に届いたのだ。彼が家に閉じこもってから最初のうちこそ鬱陶しいほどに来ていた、彼を心配したり励ましたりするメールは今や来なくなって久しかった。だからこそ、すぐに見る気になった。　今、彼は玄関のドアを開けて、風呂場へ向かっていた。脱衣所で汗の匂いがするジャージを脱ぎ、洗濯機に放り込む。低めの温度に設定したシャワーを頭から被った。　しかし、どうやって由佳は戻ってきた？　孝則はシャワーを浴びながら考え込む。排水口に水が吸い込まれていく音が妙にうるさい。　最初は嬉しさで溢れていた感情が、希望でいっぱいだった胸が、シャワーで冷やされて、思考が落ち着きを取り戻したのかもしれない。　軽く体と頭と顔を洗った彼は風呂場を出て、タオルを腰に巻きながら自室に戻る。　二ヶ月ぶりの、少しタンスの防虫剤の匂いがする制服に着替えた彼は、誰もいない家を後にした。玄関先には既に彼女がいた。「遅いよ、孝則」　このやりとりはもう何回目だろう。多すぎて忘れてしまった。「悪い。じゃあ、行こうか」　それはいつもの会話だった。ほんの二ヶ月前までは。今、その「いつも」が決して無料ではなかったことを彼は実感している。人はいつでも、何処でも、誰でも、何かを失ってからその何かの大切さに気づくのだ。「由佳、お前さぁ、何処行ってたんだ？　いきなり『ただいま』だけメールよこしてさ」　そう。由佳は何処かへ行っていた。彼は無理やりにでもそう思い込もうとしていた。そうでもしなければ説明がつかない。だが、彼女の言葉はそれをいとも簡単に打ち砕いた。「知ってるでしょ？」　彼女はそれだけ言うと、空……正確には、空のもっと上の上の方……を指差した。孝則の足が止まる。妙な汗が流れるのは、暑さだけのせいじゃない。「……嘘だよな？」　そう。知っている。聞くまでもなく、俺は答えを知っている。だからこそ否定してほしかったのに。「本当だよ」　由佳は足を止めず、そのまま孝則の先に行ってしまう。軽い足取りで、スカートを翻しながら。「じゃ

あ、お前は何なんだ？　偽者か？」「本物だよ。正真正銘由佳さんですよ？」　そうだ。目の前にいるのは由佳だ。間違いない。じゃあ、亡くなったのは誰だったのか？　そもそも、由佳は亡くなったのか？　目の前が歪むほどに孝則の思考は渦巻く。「何してんの？　もう学校だよ？」「あ、ああ」　考え事をしていたらあっという間に高校に着いてしまった。元々あまり家から離れていない学校。それも必然だった。　クラスメートの反応はどういうものだろう。それで何か分かるかもしれない。下駄箱にローファーをしまい、上履きに履き替える。上履きは埃っぽかった。　無言で階段を上り廊下を歩き、二人で並んで教室の前に立つ。今は四限目の途中だ。入り口の扉を横にスライドさせると、教室中の目が一気にこっちに向いた。一瞬、異質なものを見る目。だがそれはすぐに変わった。「おう、孝則じゃん、病気はもう大丈夫なのか？」「由佳ちゃん、今日は遅刻？　珍しいね！」　クラスメート達が群がる。それも主に孝則の方へ。「おーい。お前ら、授業中だぞー。ほどほどにな」　教師は少し呆れた顔をして、古文の授業を一時中断した。　孝則は気が遠くなった。俺が病気で、由佳は今まで普通に学校に来たことになっている？　そんなバカな。彼は混乱を隠しきれなかった。「ほら、早く席につこうよ」　由佳の声でかろうじて理性を取り戻した孝則は、生返事を返すと二ヶ月ぶりに自分の机に座った。入れっぱなしにしていた教科書がうっすらと埃がつもったまま残っていた。「おーし。それじゃあ授業再開するぞー」　はーい、とクラスの声が揃う。正確には孝則以外の声が。　元々文系の科目は得意だった孝則は、二ヶ月ぶりの古典の授業もなんなくついていくことができた。しかし、休み時間になるとまた周りを囲まれてしまう。「病気、もう平気なの？」「体動かせるのか？　勉強とか大丈夫か？　ノート見るか？」　孝則はクラスメートに囲まれていた。由佳ではなく、孝則が。「あ、ああ、大丈夫だよ。勉強も体も」「ならよかったー！　心配していたんだよ！」「困ったら言えよな！」　そう言いながらもクラスメートは皆孝則の傍を退こうとしない。孝則は一瞬由佳の方を見る。彼女は、いつものように端整な顔に笑みを浮かべていた。
「なぁ由佳、いったいどういうことなんだ？」　下校時、傾いてきた太陽が全てを赤く染める頃、孝則は絞り出すようにその言葉を口に出した。正直、言うか言うまいか、一日それだけを考えていた。「どういうことって？」　全然気にしていない風な彼女の言葉に、彼は自室にこもってる間伸びっぱなしだった髪をかきむしる。「なんで俺が病気で休学になってて、……お前が普通にクラスにいたことになってるんだ？」　孝則は辛かった。由佳のことを認めてしまいそうで。だが、返答はあまりにもあっさりしたものだった。「だって「そうだから」でしょ？」「え……？」　孝則はそれしか言えなかった。訳が分からない、といった風だ。田んぼを抜ける田舎道。カエルの声が妙に耳についた。「あたしは元気だし、あんたは病気で入院、のち退院で今に至る。それでいいじゃない」　その言葉に、彼は何も言えなかった。そうかもしれない。真実なんて、現実なんて、直視し続けていたら壊れてしまう。「それとも、やっぱり、あたしがいない方がいい？」　少しだけ悲しそうな声の由佳が、苦笑いを浮かべながら言う。「そんなわけあるか！」　彼は思わず声を荒げていた。「俺がお前のいない間にどれだけ……くそ、お前がいないのがこんなに辛かったなんて……」　切れ長の瞳から涙が溢れた。もう、今日だけで数ヶ月分泣いたかもしれない。彼のまぶたは腫れぼったかった。「俺は……」　それだけしか言えなくなった彼は、アスファルトにうずくまる。由佳はしゃがみこむとその頭に手を当てて、優しく撫

でた。「……ごめんね」　しばらく孝則は泣き続け、彼女はただそれを優しい目で見ていた。だから、謝罪の言葉の意味なんて考えもしなかった。　希望と絶望は表裏一体なのに。
　孝則が帰宅すると、喜びに満ち溢れている母親の声が聴こえ、居間に向かうと食卓には寿司が大量に並んでいた。「何これ、どうしたんだ？」　唖然とする彼に対して、彼の母は逆に驚いた顔をした。「あんたの退院祝いに決まってるじゃない。病院の食事ばっかで辛かったでしょ？」「退院……そうか、そうだったよな」　家族まで「そうなって」いたが、孝則はあまり驚かなかった。心のどこかで予測していたことだからだ。「ああ。流動食もどきばかりで味気なかった。ところで俺、なんの病気だったっけ？」「何バカ言ってんの。そんなの……あれ？　なんだったかしら？」　その時気づいた。「そうなって」いるこの世界。だが、「ほころび」がそこかしこにある。「あ、思い出した。肝炎だったよな。肝炎。寿司、親父が帰ってきたら皆で食べような」「そうそう！　肝炎よね！　肝炎！　Ａ型だったかしら。今日はお父さんも早く帰ってくるらしいわよ！」「そっか。じゃあ、ちょっと部屋で休んでる。あとで声かけて」　孝則は階段を上ると、向かって左側にある自分の部屋のノブを手にとった。ドアを開けベッドに倒れこむと、疲労感で眠ってしまいそうになる。「……どうなっちまったんだよ、この世界は」　物体の改変、否定。記憶の捏造。どれもそう簡単にできるはずがないことだ。「由佳、やっぱり、お前が？」　言った途端、背筋に冷たいものが走った。由佳がこの世界を「そうした」として……果たして、元に戻せるのだろうか。そして、戻したら、由佳はどうなってしまうのだろうか。「考えたくないけど……」　それは本心だった。そして、その後の言葉も、また。「でも、もう逃げてもいられないよな……」　程なく父親が帰宅して、豪華な夕飯になった。好物のはずの寿司の味は、考え事のせいでよくわからなかった。
　食事のあと、孝則は覚束ない足取りで二階への階段を上り自室へと戻り、またベッドに倒れ込んだ。今までを考えるのをやめ、これからを考えることを決めた彼は、由佳にメールを出した。『今、少し時間あるか？　外出れるか？』　それだけを打ち込み、送信する。返信を待たずに彼はサンダルを履いて由佳の家の前に向かった。二人の家の距離は歩いて五分もかからない。たどり着いた彼女の家の玄関先には部屋着の由佳が待っていた。「どうしたの孝則？　何か用？」いつもと変わらない由佳を見て、孝則は大きな安堵と小さな恐怖を一緒に覚えた。「なぁ由佳、やっぱりおかしい。お前が帰ってきてから、何かが違うんだ」「何かって？」　首をかしげる由佳に、孝則は額に手を置く。田舎の夜特有の虫の声が響いた。「上手く言えねーけど、なんか、おかしいんだ。矛盾っつーのか……そんな感じ」　その言葉に、由佳は視線を下に落とす。コンクリートの上を蟻が這っていた。「……仕方ないよ」「仕方ないって……」　仕方ない、という言葉は二ヶ月前のあの日を思い出させる。そう、仕方ないと思わなければやりきれなかった。「あたしね、悔しかった。悲しかった。まだやってないことだって、したいことだっていっぱいあったのに」　彼に背を向け、由佳は歩き出す。「だから、チャンスを貰ったの。あたしに残されたのはあと二日。今日を入れて三日が過ぎたらあたしは……無になる」「無になるって？」全く理解できない彼はそう尋ねることしかできなかった。生ぬるい風が彼の体を撫ぜる。季節のものなのか、それとも、何か違う要因があるのか。「そのうち分かると思うよ」　振り向いた彼女の顔は笑顔だったが、それは造ったものだと付き合いの長い彼にはわかっていた。「じゃあ、

また明日、学校でね」「あ、おい、ちょっと……」　孝則の制止に従うことなく由佳は家へと駆けていく。その姿が消えるまで、彼は一歩も動けなかった。
　その日、彼は一睡もできないまま、夜を明かした。
「孝則、おはよう」「おあよ……」　大あくびをしながら返事をした彼に、由佳は呆れた声を出した。朝の少し冷えた空気も彼の目を覚ますことはできないようだ。「孝則、目の下、すっごい隈だよ？」「気にすんな……」　――あたしは……無になる。　昨日のその言葉が脳裏に張り付いて離れない。そのせいで、孝則は眠れなかった。道中、由佳と何を喋ったかも分からない。気づけば彼は学校に着いていた。　全学年全生徒共通の昇降口。下駄箱で上履きに履き替える間に、彼は肩を叩かれた。「うっす！」「ああ……」　クラスメートの挨拶に、面倒くさそうに彼は返事をする。「どうした、元気ないな？　まだ調子悪いのか？」「ちょっとな……まぁ、大丈夫だ」　無理するなよ、と言い残して教室へ向かうクラスメート。何故か、由佳には挨拶すらせずに。「孝則、早く教室行こうよ」「そうだな……」　由佳の言葉に孝則は立ち上がり……そして、突然のめまいに彼は倒れた。遠くなっていく景色と周囲の音の中、由佳の顔と声だけが最後まで残っていた。
　もし天国があったとして。そんなもの無くて、地獄があるだけだとして。　彼はそれでもいいと思った。　天国でも、地獄でも、「そこにいてくれれば」いいと思った。　ただ、無になってしまうのが怖かった。何処にもいなくなってしまって、消えてしまう。そんなのは嫌だった。
だから彼は願った。どうか、由佳が何処かにいますように。そこで少しでも幸せでいられますように。　そこがこの世じゃなくてもいいから。どうか、それだけは。　お願いします。　神様。
　孝則の視界が霞んだ。周りがぼんやりと白く見える。目に映るのは真っ白い天井に、蛍光灯の強い光。「あ、起きた」　床の声に孝則が体を起こすと、白いシーツに包まれた掛け布団が体から落ちた。どうやらここは保健室で、自分は今まで寝ていたらしい、と気づくのにそう時間はかからなかった。「保健の先生怒ってたよ。寝不足だっ……」　現実が理解できたあと、気づけば孝則はベッドの横に座っていた由佳を抱きしめていた。「な、ちょっと！　何する……」　慌てふためく由佳に、構わず、孝則は腕の力を強める。「よかった。夢で、よかった……」　彼は泣いていた。隠すことも恥じることもなく、目から大粒の涙を流していた。由佳はひとつ大きなため息をつくと、孝則の頭を優しくなでた。「全く。もう子供じゃないんだから」「……お前が、いてくれてよかった」「ん……ごめんね。寂しい思いさせちゃって」　「もう、何処にも行かないよな？　ずっと、傍に……」　ずっと、傍に。そこまで言って彼は気づく。三日間という単語。「由佳……三日って、どういうことだ……？」　顔を上げると、由佳はまるで痛みに耐えているような表情をしていた。「言葉の通り、だよ……あたしは、元々「今、ここにいて」はいけないんだから。だから……あと二日だけなんだ。一緒にいられるの」「なんだよそれ！　どうしてだよ！　もう、何処にも行かないでくれよ！　あんな思い、もうしたくないんだよ！」　由佳は黙って首を振る。また、あの泣きそうな笑顔だった。「あたしがこのままここにいると、色々大変な事が起こるの……孝則だって、もう気づいてるでしょ？　少しずつ……少しずつおかしくなっていくのに」　孝則は、昨日の妙な両親や、今朝由佳にだけ挨拶をしなかったクラスメートを思い出した。確かにおかしい。それに、小さいところで脆さがみえる。砂でできた城のよう

に、崩れていきそうな。「それと……それと由佳がいなくなっちまうことに、何の関係があるんだよ」「あたしは、「捻じ曲げて」ここに戻ってきたの。その弊害。それを元に戻すには、あたしが消滅するしかない」「消滅って……まさか、また」　縋るような目の孝則に由佳は肩を抱くと、まっすぐにその瞳を見た。「そうよ。だってあたしは……」　ドクン。孝則の心臓の音が、うるさく聴こえた。やめろ、その続きは言わないでくれ。彼の心の叫びは届かず、由佳は口を開いた。「あたしは、死んじゃったんだから」　事故の後、由佳を運んだ救急車の中で、彼女は亡くなった。　孝則は学校に行かなくなり、自室から出なくなり、何もしなくなった。無気力に日々を過ごす、「生きて」すらいない、「死んでない」だけの日々。　後を追うほどの覚悟も、もとの生活に戻る勇気もなかった結果の、逃げ道だった。　朝起きるとそれを悔やみ、昼間はずっとまどろんで、夜に二度と目が覚めないことを願いながら眠りにつく。　そんな生活が二ヶ月も続いた。いや、由佳が帰ってこなければもっと続いていただろう。　下手をしたら一生あのままだったのだ。いや、彼は心のどこかでそれを望んでいたのかもしれない。　自分の半身、いや、それ以上とも言える存在を亡くしたのだ。由佳は彼にとってもっとも大切なものだったのだから。「やっぱり……お前は、あの日、亡くなったんだよな……」　体中が押しつぶされそうな重圧感の中、孝則はそれだけを口に出した。「そうだよ。それが、間違いの無い、本当の出来事。だから今、あたしは本当はここにいちゃいけないんだ」　拳を強く握る彼。自分の爪がてのひらに食い込むほどに。「そんな……そんなのって、あるかよ！　いいじゃないか！　ずっと、ずっと傍にいてくれよ！」「ダメなんだってば。分かるでしょ？　あたし達の近く、どんどん色んな事が捻じ曲がってるよね？」　病院に入院していたはずの孝則。由佳を自然に向かいいれたクラスメート。兆候はいくらでもあった。「今はこれくらいで済む。だけど、これからどんどんおかしくなっていく。この町からはじまって、この市、この県、この国、そして、世界全部が、おかしくなっていく」　孝則は俯いたまま、何も言わなかった。沈黙を避けるように由佳は続けた。「そして、最後は取り返しがつかなくなる。だからあたしはあと二日しかいられない。仕方ないんだ。そういうものなんだよ」「そんなんで諦められるか！　また、またお前が死ぬなんて、俺は嫌だ！」　顔を上げた孝則は興奮して由佳に詰め寄る。彼女にあたっても意味がないことなんて、彼が一番分かっている。なのに、そうしてしまった。そうすることしかできなかった。「死ぬんじゃないよ。……無に、なるんだよ」「なんだよそれ、どういう意味だよ？　何か違うのかよ？」　人は亡くなったら無になる、そういうことじゃないのか、と彼は解釈していた。「死ぬ、と無になるのは違うよ。死んでも記憶は残る。生きた証は残るんだ。けど、無になるのは違う。……記憶からも、消えるんだよ」　泣きそうな顔で、言葉をつむぐ由佳。「記憶から……？　じゃあ、お前が遺したものはどうなるんだ？」「それも……消えてなくなる。何も残らないの」　何も残らない。記憶も、品物も、全て消える。忘却の彼方へ。「そんな……そんなの、死ぬよりひどいじゃないか……」　力なくベッドにへたりこむ孝則。その瞳は絶望に侵されていた。「あたしは死を否定しちゃったから、それと同様以上の対価を支払わなければならない、そういうことだよ」「なんで……なんでそんな事したんだよ……三日間……たった三日と引き換えに、記憶からも消えるなんて……そんな事があってたまるか……！」　孝則の体から力が抜け、瞳からは涙が溢れた。「あたしのエゴかもしれない。だけど……孝則を見てられなかった

んだ」　自分の名前を呼ばれ、彼は頭を抱える。「……聞きたくない」「お願い、聞いて」　返事はなかった。「あたしが死んじゃった後の、廃人みたいになった孝則を見てられなかった。あたしのこと、忘れて欲しかった。けど、最後に思い出が欲しかった。あたしだけの、孝則との思い出」「……消えちまう思い出なんて、必要なのか？」「孝則が忘れても、あたしが覚えてる」　黙って彼は頭から手を下ろし、由佳の瞳を見つめる。音のない保健室で、彼の叫びだけが響く。「なんで。なんでこうなっちまうんだよ！　俺やお前が、何したって言うんだよ……！」「人は……生き物は、ううん、この世にある全てのものは、いつか朽ちて死ぬんだよ。それは、どうしようもないんだよ。だから、残された時間を大切にしたいんだ」「残された時間……たった後一日半で何ができるんだよ！」　興奮する孝則を、由佳は優しい笑顔で受け止めた。「なんでもできるよ。一日って、意外と長いんだよ？」　由佳はベッド横の椅子から立ち上がり、孝則に手を伸ばした。「寝不足、もう大丈夫だよね？　これから、一緒に何処かへ行こう？　学校なんてサボっちゃってさ」　　彼は少し躊躇して……それから、孝則はしっかりと彼女の手を掴んだ。　　学生カバンを下げ、制服を着たまま二人は電車に乗りこんだ。行き先は決めていない。
　孝則と由佳は肩を寄せ合い、何も言わず電車に揺られていた。　終着駅に着いたときにはもう夕方だった。改札がひとつしかない駅を降りると、潮の香りがした。「海だ。二人で来たことなかったよね」　由佳は堤防にある階段を下り、ソックスとローファーを脱ぐと裸足になって砂浜を歩いた。波打ち際までたどり着くと、素足に波がかかる。「うわー。冷たい！　孝則も来ないの？」「俺はいいよ」　彼はただ、目の前にいる恋人のはしゃぐ姿を見ているだけでよかった。それで満たされていた。二人は二時間ほど潮風に当たりながら海を見て、帰りの電車に乗った。
　やはり帰りの電車内も会話はなかった。由佳に至ってははしゃぎすぎた疲れか、孝則に寄りかかり眠ってしまっている。　田舎の人が少ない鈍行列車の中で彼は、体を預けてきた由佳の髪から漂う甘い香りに、何故か悲しさを覚えた。
「ほら、由佳、ついたぞ」「んー……？」　最寄り駅に着いた二人。孝則が由佳をひっぱるように電車内から連れ出した。寝起きが悪いタイプではなかったのに、と孝則は苦笑する。「……本当に、消えるのか？」　二人で並んで歩く帰り道、孝則が何気ない風に装って、由佳に尋ねる。「ん……消えちゃう」　髪をかきあげた彼女は静かに、そしてとても悲しそうにそれを肯定した。「それじゃあ、明日のわがままは俺の番でいいか？」　由佳が自分より少し背の高い孝則を見上げる。「明日……朝の五時に、由佳の家の前集合。荷物は軽めだけど、水筒は忘れるなよ」「わかった」　また二人に沈黙が戻る。ひとつ違っていたのは二人が手を繋いでいたことだけだった。
　彼は家に帰ると適度な大きさのリュックに荷物を詰め込み、ベッドに倒れた。　不思議なことに、おそらく電話を貰ったであろう学校を抜け出したことや、遅く帰宅したことは何も言われなかった。
　そして、次の日。由佳の家の前で彼は待っていた。きっかり五時、彼女は静かに家を出てきた。「……いくか」「うん」　彼が差し出した手を、彼女が掴む。
　彼らが行き着いたのは、徒歩で一時間もかからない小さな山。小さい頃の夏休みの遊び場だった。入っていくと、土と木の香りがして、昔を思い出させた。「俺達さ、ここでよく遊んだよ

な」「そうだね」　孝則と由佳はゆっくりと山を登っていく。指を絡ませるように手をつなぎながら。「あの場所、覚えてるか？　ここから少し歩くけど」「……もしかして花がいっぱい咲いてる場所？」　二人が小学生の時に見つけた、山の木々の切れ目に、たくさんの花が咲いている小さな平地があった。そこは孝則と由佳だけの秘密の場所。「そうだ。あそこに行こう」「うん。楽しみ」　ゆっくりと、ゆっくりと山を登っていく。暫くすると木々がひらけ、目的地にたどり着いた。朝の光に照らされてその場所は残っていた。「そんな……」　そう、残ってはいた。だが綺麗だった野生の花畑は全て刈り取られ、今見えるのは枯れかけた雑草だけの荒地だった。孝則は力なく肩落とす。「最後まで……最後までこんな……」「ううん。あたし嬉しいよ。孝則、まだ覚えててくれたんだから。……お花は無いけど、あたしは幸せだよ」　由佳は真ん中にビニールシートをひくと、靴を脱いで座った。孝則もそれに倣う。　二人はよりそって座っていた。昼食を食べ、時にまどろみ、時に手を繋いで、時に話をし、時間はあっという間に過ぎていった。　夕方を通り越して、夜。「星が綺麗だな」　いくら片田舎だとはいえ、ここと街中で見る夜空とは比べ物にならない。今の空はまるで黒い画用紙に白の絵の具を散らしたようだった。星が降ってきそう、というのはこういう光景なのだろう。「うん。あたしも……あのひとつに、なるのかな」　時刻は午後十時。門限なんてもう関係が無かった。携帯はバッテリーを抜いてリュックに放り込んである。「孝則、最後にひとつだけ、お願い」「なんだ？　最後にはまだ早いだろ？」「ちょっとね。……あの、キス、して欲しいな、なんて」　暗くて彼にはよく分からなかったが、彼女の顔は耳まで真っ赤になっていた。「そうだな。俺達、そんなこともできなかったんだよな……いいよ。しよう」　孝則は彼女の向き直り、優しく頬をなでる。由佳が目を閉じた。　触れるだけの初めてらしい可愛いキスは、涙の味がした。「孝則、ありがとう。……さよなら」　その言葉を聞いた途端、彼は強烈な睡魔に襲われた。視界が歪む。頭の中が霧で霞む。　まてよ、まだ、二時間もあるじゃねぇか！　待ってくれ……由佳！　声に出すこともできずに、消え行く意識の中、彼はそれだけを思っていた。

　目が覚めた彼は、腕時計を確認した。午前一時。周りは山の中。ビニールシートすらなく、彼は地面に直に横になっていた。荷物が草むらに転がっている。「……あれ、俺、いったいなにしてたんだ？」

「なーんか、引っかかるんだよな」「どうした？」　次の日の学校。孝則が呟くと隣の席の友人が首を突っ込んできた。「いや、なんか大切なこと忘れてる気がして……」　彼は髪をかきむしる。すっかり癖になってしまったようだ。「気にすんなよ。そうだ、授業終わったらカラオケにでも行こうぜ」「あ、いや悪い、今日はパスだ。なんか昨日丸一日記憶が無くてな。病院にいかなきゃいけないみたいだ」「そっか。まだ病み上がりなんだから、無理すんなよ？」　授業開始のベルが鳴り、友人は隣の席につく。今日もまた、退屈な授業が始まる。いつもと変わらない日々が。

「……なんかよく分からないな、採血は痛かったけど」　病院の帰り道、彼は一人で田舎道を歩いていた。レントゲン、血液検査……様々な検査の結果は全て異常なし。薬も処方されていない。　ただ……何かが足りない。そんな気だけがした。まるで、自分の隣にはいつも誰かがいて、今はそれが無いかのような。（孝則、頑張ってね）「え？」　歩いていると声が聞こえた、

気がした。だが、振り向いてもそこには誰もいなかった。そもそも、こんな開けた場所で声が聞こえるはずもない。ただ、涙が溢れた。理由も分からないのに、胸が痛い。「あれ？　いったいなんだよ……まったく」　立ち止まって制服の袖で涙をぬぐい、秋の香りがし始めた大空を見上げる。さっきの涙は、太陽が目に入ったからだ。そう無理やり説明をつけて、彼は視線を前に戻す。

腕の時計を確認する。時刻は五時を少し回ったところ。　そして彼は、また歩き出した。

〈了〉